

審査の結果の要旨

氏名 安 昶 憲

論文題目 在宅勤務の視点からの住居計画に関する研究

この論文は、さまざまな勤務形態上の変化を見せている現代社会における在宅勤務者の住居空間内の豊かな勤務空間計画の方策を考察することを目的としている。

本論文は全7章から構成される。

第Ⅰ章では、関連する既往研究の概観を通じて、本研究の背景・位置づけと目的を明らかにしている。

第Ⅱ章では、在宅勤務空間をオフィス空間と住居空間とのふたつの要素から捉え、それぞれの歴史や在宅勤務の現状・効果を企業・社会的側面と個人的側面に分けて考察している。さらに、在宅勤務者の社会的関係と家族関係を心理的及びコミュニケーションの変化を通じて考察を行っている。

第Ⅲ章では、在宅勤務空間を要素別と勤務空間類型別に分けて、調査・分析を行うための方向性を明らかにするための一般的考察ならびに研究仮説の設定を行っている。

第Ⅳ章では、調査の内容・経緯と方法について述べている。さらに、在宅勤務者の特徴として特別な母集団を持っていることが少ないことと、コンピュータネットワークの普及が在宅勤務の背景になっていることから、調査方法としてインターネットやメールを用いる際の注意点を考察している。

第Ⅴ章では、「在宅勤務の一般的要素分析」と「時間による在宅勤務の分析」とのそれぞれについて分析を行った結果をまとめている。

先ず、前者では、対象者の全般的勤務上の属性、在宅勤務空間の構成を満足度と比較しながら分析を行っている。そして、男性の約7割が月20回以上、一日8時間以上

の在宅勤務を行い、勤務時間上はオフィス勤務者とほとんど変わらないこと、また女性は月9.6回～月13.7回、一日3時間～6時間の勤務を行っていることを指摘している。勤務空間類型として専用タイプ・共用タイプ・コーナータイプ・食卓タイプに分かれ、女性は結婚・同居によりタイプを変えることが多いことから家族構成に影響されること、専用タイプの利用者・希望者が最も多く、満足度も最も高いこと、勤務空間の広さは、現状の1.2倍～1.5倍、平均的に6畳間前後の広さを希望していることを指摘している。ワークステーションはデスクのI字型が最も多く、2重I字型が総合的満足度が最も高く、特に作業性・レイアウトの面での満足が目立ち、一方、L字型は収納と落ち着きの満足が高いことから、コーナータイプワークステーションとして適し、さらに出勤や出入りが頻繁な者ほど自分の専用空間を必要としていることを指摘している。

次に、後者では時間を分類軸にした理由を明らかにした上で分析を行っている。そして、主勤務空間を離れた副勤務空間の場所として居間が最も多く使われ、さらに、その理由が非勤務的要素であることから、生活との関連は副勤務空間を通し行われることを指摘している。また、約30%の者が午前9時以前から勤務を開始し、午前9～12時までに88%の者が勤務を行うという規則性が見られたが、午後はさまざま、夜遅くまでの勤務や2時間以上の休息時間の者が65%に達することを指摘している。

その他、「休息時間に関する分析」、「生活時間に関する分析」、「余暇時間に関する分析」などを実施している。

第VI章では、第V章で得られた結果をまとめた上、今回の調査からは最も効率的な在宅勤務空間タイプは専用タイプであり、ワークステーションとしては2重I字型が適するという提案を行っている。

第VII章では、第VI章で行った休息空間の提案から生じられるリビングルームの二分化の妥当性について関連文献を通じて考察を行っている。

以上のように、本論文は今日的な課題である在宅勤務の住居内空間を実例分析を通して考察したものである。変化の激しい現代社会において今後ますます増加が予想される勤務形態に対応した環境の在り方について基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与をしたものである。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。